

今日の福音書は、前半では、王様が王子のために人々を婚宴に招待したのに、人々は、いろいろな理由をつけて断ってしまった話でした。特に使いに出した家来を殺した者たちがいたので、その人たちを滅ぼして、その町を焼き払った。そして、招いていなかった、町の大通りを通る人々をかき集めて、婚宴の客をいっぱいにしたという話です。そして、後半が礼服のことです。

このところ、3週ほど、ぶどう園の主人と労働者や息子のお話が続きましたが、今日は王子の結婚式の披露宴のお話にかわりました。しかし、お話の組み立ては、先週のものとは変わりません。ぶどう園の主人が、王様に代わり、また、主人の僕を拒否した労働者が、婚宴に招待を受けながら、それを断った招待客に代わっただけです。

前半の話、これは、みなさん、すぐに何のことだかおわかりでしょう。

王子の婚宴とは、神の国のことです。そして、神様は先ず、聖書の民であるユダヤ人を招かれました。ところが、先週のぶどう園と農夫の話と同じで、神様から大切にされていたユダヤ人は、王子であるイエス様を受け入れず、拒否してしまったのです。（先週の旧約で言えば、すっばいぶどうになった、ということ。）でもそのことで、ユダヤ人を殺したり、町を焼き払ったりするのは、とてもひどい話です。おそらく、イエス様はそこまでの話はされなかったのに、マタイさんが付け加えたのでしょう。

と言うのは、このマタイによる福音書が書かれた頃、もうイスラエルの首都エルサレムは、ローマ帝国の兵士たちによって、崩され、焼き払われていたのです。「エルサレムが焼き滅ぼされたのは、ユダヤ人が、神様の子であるイエス様を受け入れず、殺してしまったからだ。」とこの福音書の著者は言いたいのでしょう。

そんな焼き払われた町の大通りで、別のお客を集めるなんて、まともには考えられませんが、エルサレムの陥落を乗り越えて、キリストの教会は、ユダヤ人以外の人々、異邦人を招いていることを語りたいのでしょうね。ここまでは、簡単にわかります。

問題は、後半の礼服のお話です。

王様は、自分の招待に応えてくれない人々によって、不愉快な思いになったけど、町の大通りで善人であろうと悪人であろうと、人をかき集めて、会場はいっぱいになりました。ところがその中に、礼服を着ていない人がいた、ということで、彼のことを追い出してしまいました。

この人にしてみれば、特にこの婚宴に出席しなかったわけでもなく、家来たちに引っ張ってこられたのですから、それをまた、「礼服を着ていない」と叱られて、外に追い出されたのではたまったものではありません。この「礼服を着ていない」というのは、何を意味しているのでしょうか。

最初に招かれた人々は、ユダヤ人の指導者たちであり、その後、大通りで集められた人々が、異邦人キリスト者ということは容易に想像がつかます。

善人も悪人も集めた、というのですから、その時代の教会の人々にも、いろんなタイプの人がいた、ということでしょうね。

もう、この話は、みなさん何度も聞かれていて、ご存知と思いますが、当時の婚宴の会場には、入口に礼服が用意されていて、だれでもそれを着て、会場に入ることができました。「私は着て行く服がないから、婚宴には行けない。」などと、心配をする必要はなかったのです。

ですから、「礼服を着てない人」というのは、着る服がなかったのではなく、「礼服自体を着たくなかった人だ」ということなんだろうと思います。

このマタイによる福音書ができあがった頃、教会の中で注目されていた言葉は、「キリストを着る」ということでした。ローマの信徒への手紙 13：14「主イエス・キリストを身にまといなさい。」また、ガラテヤの信徒への手紙 3：27「洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。」エフェソの信徒への手紙 4：22～24「だから、以前のような生き方をして情欲に迷わされ、滅びに向かっている古い人を脱ぎ捨て、心の底から新たにされて、神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません。」

これらの手紙を書いたパウロはキリストを着ることを強調しています。ここでの問題は、私たちがキリストの婚宴に招かれているのに、本当にキリストを必要としているだろうか、ということです。

聖書の歴史は、キリストを着る歴史と言ってもいいかもしれません。神様の言いつけを守れず、自分の身を隠したアダムとエバは、裸であることに気づき、いちじくの葉で体を覆いました。しかしそれでは生活できないので、神様が自ら、彼らに「皮の衣」を作って着せました。これで、彼らは神様の目から逃れて隠れることもなく、堂々と生活できるようになりました。

この皮の衣は、どうやってできたのでしょうか。まだ、この頃は、エデンの園にできる実から食べることもしか許可されていません。肉食が認められたのは、ノアの洪水の後です。そんな時、神様は御自分の作られた動物を殺して、犠牲をはらってアダムとエバを活かしてくださった、ということです。

これと同じように、私たちは、自分の力では、生きてゆけない。それを神様が守って、今日の詩編 23 編のように、私たちを導いてくださる。それは、キリストが私たちを包んで、保護し、神様の前に立たせてくださるからです。キリストが罪ある私たちに代わって死に、そのキリストを着ることで、神様の前に出ることができるようになったのです。

そのキリストに感謝する祝いの席に、キリストなんか必要ない、という態度の人を神様は喜ぶはずがありません。礼服を着ないでいる人を、外につまみ出すのは、当然でしょう。

私たちは、本当にキリストを必要としており、その肉と血を頂くことで生きるんだ、という信仰に立ちかえることが、今日の福音書から促されているように思います。

宮崎に来た最初の頃ですが、宮崎聖三一教会は、夏のお楽しみ会をして、「いのちをいただく」という絵本の読み聞かせの動画を子ども達に見せたことがあります。

これは、熊本県の牛を殺して肉にする、食肉センターで働いている人のお話でした。この仕事は大切な職業です。しかし動物を殺して肉にするのは、それに従事している人には、嫌な思いをする仕事です。授業参観の日、その人の小学三年生の息子は、親の仕事を「普通の肉屋です」としか言えませんでした。でも、学校の先生は放課後、その子の父親の仕事がいかに大切なものであるかをその子に言い聞かせます。

ところがある日、父親が職場から帰ろうとする頃、次の日に殺される牛がトラックで運び込まれました。すると助手席から小さな女の子が降りてきて、牛のいる荷台に昇ってゆくのです。その女の子は、殺される牛のみいちゃんと離れられなくて、「みいちゃんごめんね。みいちゃんごめんね。みいちゃんが肉にならんとお正月がこんで、じいちゃんがいわすけん。みいちゃんを売らんと、みんながくらせんけん。ごめんね。みいちゃんごめんね。」

この光景を目にして、翌日その牛を殺さなければならないお父さんは悩み、小学生の息子に話しますが、息子は、牛が苦しまないように、お父さんが殺さなきゃだめだ。心ない人がやると、急所を外して、牛が苦しんで暴れてしまう、というわけです。それで、お父さんは翌日、牛のみいちゃんを優しくなでながら、じっとしているように言い聞かせて、殺すことになりました。お父さんがピストルのようなもので急所を撃つと、そして牛は暴れることなく、その場に倒れて死んだのです。

その後、牛の肉の一部をもらって帰った持ち主のおじいちゃんが、みんなでその牛の肉を食べた話をしました。孫は泣いて食べないので「みいちゃんのおかげで、みんながくらするとぞ。たべてやれ。みいちゃんに、ありがとうといってたべてやらな、みいちゃんがかわいそかる？食べてやんなっせ」っておじいちゃんがいうたら、孫は泣きながら「みいちゃん、いただきます」「おいしか」いうてたべました。ありがとうございました。」その話を聞いて、おとうさんはもうすこしこの仕事を続けようと思った、という話です。

この女の子の一家が、牛のみいちゃんが肉になることによって生活できたように、そして、この女の子がみいちゃんの肉を食べて、みいちゃんに感謝したように、私たちは、イエス様の犠牲を感謝して、キリストの肉であるパンをいただいている、ということでしょう。

日本語には「恩に着る」という言葉があります。「恩を受けたことをありがたく思う」という意味ですが、わたしたちは、キリストの犠牲を恩に着て、神様の祝宴に参加する、ということをお願いしたいのです。

私たちが着るべき礼服とは、キリストの犠牲を恩に着て、感謝しながらキリストの犠牲の肉を味わうことのように私には思えるのです。その感謝を忘れる時、私たちはいかに立派な服を着て礼拝に出席していても、外につまみ出されるのではないのでしょうか。